アダム・スミスにおける支配労働価値説の学説史的意義

神橋 秀典

＜修士論文・構成案＞

はじめに

1、スミス支配労働価値説の理論的特徴

　1－1　歴史的背景と動機

　1－2　理論構成

2、スミス支配労働価値説の継承問題

　2－1　リカード『原理』におけるスミス価値論解釈とその問題性

　2－2　マルクス『剰余価値学説史』におけるスミス価値論の継承・発展

　2－3　支配労働価値説と二つの社会形態 ――初期未開社会と資本主義社会――

　2－4　支配労働価値説を支持した学説

3、スミス支配労働価値説に対する現代的評価とその問題状況

　3－1　スミス支配労働価値説に対する定説とその諸問題

　3－2　スミス支配労働価値説に対する新解釈の提示

　3－3　スミス支配労働価値説の学説史的意義

おわりに

●スミス支配労働価値説と重商主義批判

　なぜ支配労働価値説が重商主義批判のコアになるのか？

　・保護政策による物価上昇のみを根拠とした重商主義批判の限界

　・外面的な金銀による名目価格の変動を捨象、貨幣に代わる不変の価値尺度の探求

　・商品に内在している価値の存在をまず明確に提示する必要性

●支配労働の概念

　支配する商品に投下された労働（スミス）　　支配する賃労働（リカード）

　考察の対象が必然的に資本主義社会に限定される。

　→　支配労働の概念を初期未開社会に対する考察に用いることが事実上不可能に。

　　スミスはあらゆる社会で支配労働価値説を想定。

●支配労働と投下労働を「同義の表現」　→　何が問題か？

　・リカードは両者が一致しないことを論証

　　労働を不変の価値尺度と見なすスミスの価値論に対する否定的見解を主張

　　→　資本主義社会における支配労働量と投下労働量の不一致

　・マルクス『剰余価値学説史』でも両者の「混同」が指摘　→　リカードからの影響

　　「混在」説と一本化説

●支配労働価値説と投下労働価値説は不可分一体の関係　→　リカードは二者択一的に。